
Distorted Destiny IN Magister Negi Magi **本編**

黒灰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / D i s t o r t e d D e s t i n y I N M a g
i s t e r N e g i M a g i 本編

【Nコード】

N 6 8 5 0 W

【作者名】

黒灰

【あらすじ】

時代は遂に2002年へ。

歪められた運命は何処へと向かう。

まえがき

2011/9/13現在、第1部、第0部という名の番外編を展開中です。

つまりこちらが本編となります。

その事を最初にネタばれして始めたいと思います。

現在第一部をメインに執筆しておりますが、過去話をする都合上、第0部のプロットを白紙の状態から組み上げる必要が出てきており、非常にこれからの執筆が難航する予感です。

ちなみに筆者

受験生でマジヤバイことになってますので更に遅れます。

なのですが迷惑なことに

とりあえずここに本編の存在をバラして放置することにします。

まとめますと、

現在の優先順位は $pt.1 < pt.0$

でもそのままだと書けないので0部をまずプロットだけでも纏めるよ
ついでにそれと関係なく本編予告したよ

そんで受験とかあるから時間なくて書けないお

以上です。

なぜ活動報告で書かないのか？

気分です。

あの鐘が鳴る頃には（前書き）

オリジナルキャラクターに注意して下さい。
そっとうの嫌いな方は御免なさい。
まだ増えますすみません。

あの鐘が鳴る頃には

●

埼玉県麻帆良市。

そこに、麻帆良学園都市という一大学園都市が存在する。

街並みは西洋的で美麗であり、一言で言えば「洒落ている」というのが説明としては適当だろう。

建造物の形式・様式などは何れもイタリア・フィレンツェにルーツを求めることが出来る、と言えるかもしれない。

幼等部から大学部までのあらゆる学術機関の総称、それが麻帆良学園。

極大数の学校を抱え、さらに都市としての機能も完全と言えるこの都市。

だが、一つ問題があった。

時に。今は2002年9月。

新学期が始まってから既に2週間ほど経過している。

朝。

空は蒼く晴れ渡り、太陽の光を遮るものは一切存在しない。涼やか、とは言えず、残暑の名残を残す程度には暑い日だ。時間帯はと言つと、

始業ベル10分前。

- - - - -
- - - - -

そこは楽園。シャングリラそこは楽園。バラダイスそこは楽園。エデン

誰も届かなかった理想郷。アウアロン

その薫りの風下。

ここは楽園。ニライカナイ

Q・今、幸せ楽しいかい？

A・はい。

b y 色々と皆

- - - - -
- - - - -

●

中学・高校エリア。

今の時間帯だと、普通は駅の前という、校舎から遠く離れた場所には生徒はもはやまばら、且つ決まったメンバーのみが集まると思うだろう。しかしこの学園都市ではその先入観が一切通用しない。

『学園生徒の皆さん、こちら生活指導委員会です。毎週恒例遅刻者ゼロ週間ですが、皆様こんな時間に登校しているのも如何かと思えます。一言で申し上げますと馬鹿なの？

「誠に遺憾だ、それではイカン」と新田先生も度々仰っていますが、私共はそちらには「ウゼエ」の一言と言えます。ですので現在始業

ベルまで10分を切っておりますが、遅刻の場合には今週は特別措置として一発目からレッドカード進呈となります。アンコモンカードですので奮って収集してみても如何でしょう。尚、稀な事例ではありませんが本気にする馬鹿共が居らっしゃるようです。その方々は400字詰めホワイトカード10枚進呈いたしますのでそれに懺悔の言葉を

」

エリア全体に放送がかかる。

校舎に向かって走る大勢の生徒に向けたものだ。

「急げ！早くだ！とつと走れ走れ！」

スケートボードに乗った、鉢巻を巻いた少年が改札から飛び出した。飛び出した、というより跳び出た、というべきだろうか。

オーリーというトリックを決めながら跳躍。

捲し立てるように、自身とその他大勢を急ぎ立てるように叫んでもいる。

お前スケボーじゃねえか、と突っ込む声も2、3程。

「早く来い来い！」

同じくスケートボードに乗りながら路面電車の後部バーを掴んで移動する男子生徒がいる。

「おー！」

それを追う、ローラースケートを履いた男子生徒。

これらは珍しい光景ではない。

日常茶飯事である。

登校手段としてスケートボード・ローラースケートを利用する生徒は決して少なくはない。

普通ではあまり考えられない事だ。

そして定番である自転車は人ごみの所為で非常に不利な移動手段となる。

そのため、スケートボードなどを使いこなせない人間は必然的に走り、もしくは2線走っている路面電車を利用することとなる。

一方で、生徒以外にも走る人間は居る。

「移動購買部」の旗を掲げた、クルーザーバイク二人乗りの一組だ。車種はヤマハ・ドラッグスタークラシック400。重厚なスタイルを持つ、どこか古風な雰囲気を持つデザインだ。後ろにパンを販売する人間を乗せて走っている。それを追う生徒もあり、速度は徐行気味だ。

●

「オバちゃん！カレーパンとコロッケパン一つずつええか！？」

「あいよー！」

尖ったヘアスタイルをした、やや長めの黒髪の男子生徒が走りながら関西弁で言う。

それに反応するのはパン屋のおばさん。走るバイクの後部座席に乗っている。

「料金行くで！」

「ほいきた！」

少年が500円を彼女に放り投げる。

おばさんが空かさずそれを受け取ると、即座にパンを二つ、お釣りと一緒に袋に詰め、間もなく宙に放り出す。

少年はバイクの右サイドを追い越すと同時に左手で受け取る。

「ありがとな！明日もよろしく！」

「こっちもいつもありがとさん！」

バイクと並走しながらそう言ったやりとりをし、追い越して進む。

目の前には彼の義姉達が既に先行している。

一言挨拶ぐらいして行かなあかな、と思い、それに追いつくべく更に加速する。

「本当に慌しいです。コレばかりはやはり問題ですね」

「……あのな、私はそんな事を言った覚えはないんだが？」

「いいえ、新田先生。貴方がこの手の寒いオヤジギャグが好きであることは公然の秘密ですの」

「は！？そんな設定はなかった筈では！？」

「ええ、こちらでそういうことにさせて頂きましたから」

「ひ、酷いとは思わんのかそんなデタラメを流布しておいて!? 事実をちゃんと把握してだな!？」

「いいえ、事実になります。共通認識では」

「お、お前、な、何と言うことを……！」

戸惑う怒声と突き刺す軽口。

それが響くのは、数ある放送室の中でも中央を担う放送室だ。

場所はこのエリア最奥、女子中等部の内部。

このやり取りを演じているのは一人の男性教師と一人の女生徒。周りの生徒達の反応は多様だ。

笑つて見ている者や、それに加えてツツコミを入れる者、もしくはギャグ好きであることが虚実であつたことに驚く者、その

どれでもなく完全にスルーする者、といった具合だ。

「衛宮……お前にはまたしつかりと説教をせねばならんと思うのだが……！」

教師が青筋をこめかみに浮かばせながら怒気を放つ。

それを意にも介さない女生徒は、さながら劇場の上にいるように芝居めかした仕草と声で返す。

「いいえ、新田先生。私はドイツ人の血統。ええ、偉大なるドイツは優秀ですので学習は一度で完璧ですとも」

青筋と対称、眉間に皺の寄った怒り顔を赤に染め、怒鳴る。

「ならばその嫌がらせを何とかせんか!？」

「学習はしましたよ？ 学習は」

「じ、実践せんのか!？そもそも学習した意味がないだろうに!」

飄々と躲す女生徒に愕然とする教師。

指摘は更に続くものの、意味を成さない。

「この世の物事全てには意味があり、私の為す事にも意味があるわけです」

右手の人差指を突き付け、

「よって新田先生、 貴方は間違っています！教育者としてどうかと思います!」

「その論理に持ち込む事自体が間違いだろう!？お前も生徒としてどうなのかと思うぞ!？」

遂には論点という矛先が自身にも向けられた事にも気付き、憤りを加速させる。

それに満足気な表情を得た彼女。序に見上げるのは壁掛け時計。針の指している時刻を改めて確認し、言う。

「それは兎も角、私が遅刻するわけには行きませんし、そろそろ行きますねー」

「待たんか！？まだ話は終わって」

「私に遅刻せよ、と？ああ……何と無体な先生なのでしょう！これは学園長に告発せねば……」

「分かったからもう行きなさい！ああもう……！」

引き止める意味は無い。痛みを得るのは自分自身である。

彼はそれに気付いて更に血圧が上がり、一層酷さを増す頭痛に悩む。

やり取りが終わると、そこには妙にすっきりした且つ嫌らしい顔をした白髪紅眼の女生徒と、

白髪の多い頭と四角い眼鏡が特徴と言える、頑固そうな教師がぐったりしている様子が有った。

その生徒が放送室を出たのを合図にするかのように、他の生徒も次々と退出していく。

最後にその教師が一人、溜息を付いて放送室を出た。

「あと半年の辛抱だ……！あと半年で委員会が入れ替わる……！」

両こめかみを右手の親指と薬指で抑えながら、自分をその言葉で鼓舞する。

しかし、彼の受難はそれだけでは無い。

騒ぎはまだ終わらない。

●

走る。

黒髪の少年は初秋の朝空を疾駆する。

荷物は背中のリュックと左手に抱えたパンの袋だ。

人混みを避け、掻い潜る。

少しスピードが落ちる。だが僅かだ。

右肩から抜く形でリュックを半分外す。

そして左手に抱えたパン袋を右手に持ち直し、左肩に引つかかるようになったリュックの一番大きな収納部分に入るジッパーを開け、放り込む。そして入れ替わりで取り出した物がある。

握られるのは二本の白木の木刀だ。

材質は白樫、寸法は60cm程。リュックの中には斜めになる形で仕舞われていたようだ。

右手に2本を握り、ジッパーを閉め、リュックを担ぎ直す。

そして再び加速し、

「
覚悟せや！」

目の前に走る義姉に向かって、襲い掛かる。

……今日は揉んだる！その……締まって尚且つ丸く絶妙にエロさ漂う尻をな！

●
義姉は走りながらも、既に待ち構えていた。

彼女もまた荷物はリュックなのだが、右手に握られている物が異常だ。

二本の直棒だ。こちらは木刀ではなく、只の棒に見える。

だが、グリップ部分には黒いウレタンゴムが巻かれており、握りやすさを向上させてある。

色は黒塗にされており、寸法はこちらも約60cm。材質は”鉄木”ウリン。

ウリン。

原産は東南アジア、特にマレーシアとインドネシアの木である。

保護樹として指定されていたため、国外への持ち出しが禁じられていた。

木材輸出機関

しかし1996年7月、インドネシアの首都ジャカルタで行われたI・S・A会議に於いて輸出が解禁となり、この日本にも入ることになったのだが、如何せんまだ10年も経っていない。まだ馴染みの薄い材である。

木材にとって弱点である腐食にも非常に強く、水中でも100年の耐久力を保証するというデタラメ。

実際、水中での耐久力維持は鉄にすら勝る。特に海水に浸かっているのならば顕著に差が現れる。

例を挙げよう。

港湾設備の改築、ということが有った。

しかし、改修のみで済んだのだ。その内容はボルトの入れ替え。

そう。海水に浸かるという劣悪な環境。その中で鋼鉄のボルトは腐

食しきっていた。

だが木材部分はそうではなく、再使用に耐えることが分かった。そして、その木材こそウリンだった。

故に、ウリンは”鉄木”の渾名で言われる木の一つに数えられる。ちなみに、木材の形状維持についても優秀であり、直射日光による反りも殆ど無い。

だが、短所もある。

乾燥が困難であることと、もう一つ。

義弟の得物の材であるシラカシよりもさらに1・3倍程重い。

しかし、武器として使う以上、それはメリットにも成り得る。

この得物の使い手たる女は、それを体現する。

彼女は迫る義弟の姿を、長い白髪を翻しながら右肩越しに捉え、

……来たな？まあそう簡単に揉ませるつもりもあらへんけどな！

「愚弟！」

朝の挨拶より先にこの言葉を投げつける。

「姉ちゃん！姉ちゃん！毎朝やけど酷いやんそれ！」

「喧しいわ！」勝った尻揉んだるわい！」って勝負挑んでくるドシスコンが愚弟以外の何やねん！」

「ええやん！義理なんやで！？美人なんやで！？二号になれ言わんけど魅力的やん姉ちゃん！特に尻！」

「ええか？姉ちゃんはちゃあーんと貞操守る気でおるねん尻ヴァージンもやらへんわアホ！」

「決めたで。 今回も目標変更で胸ヴァージン貰たる！揺れる美デカ乳も堪らんしな！」

「このド変態愚弟め……！てか何時も言うところけどな？彼女に触らせてもらえばええやん！もつと……ドカーンやん！ドカーン！」

「 良い乳は触らな損や！目の前にあればモミシングするしか無いやろ！」

「ド畜生め……！」

かくして、今朝も白と黒の織り成す剣の舞ソードダンスが始まる。

●

「また始まったわね……」

「ええやん。もう一年半ずっとこうやし、慣れっこやろ？」

「そうは言っても、ねえ……？」

姉弟達がそうやり取りしている後方、極近くで二人の少女らが話す。片方は走りで、もう一方はローラースケート。

走る少女は、茶髪のツインテールを揺らし、結び目の髪飾りの鈴を鳴らしながら。

滑走する少女は姉弟の姉の方によく似た髪型だ。長く美しい黒髪は風に揺れる。

「あの姉弟は本当過激よね。今のはそうでもないけど、 刹

那の方は行動じゃなくて実際の言動が数倍ヤバイし」

「せっちゃんはや行動行動どっちもアウトなコタくん比べても劣らない辺り凄いやろ？」

「……このか？ ”どや？”って感じで自慢すること？ねえ？それブチ切れるべきよね？呆れるべきよね？」

「アスナ？良いオパ―イは財産やで？」

「スルー！？しかも小太郎に同意！？」

遅刻寸前、^{レッドカード}赤紙を避けるべく疾走しながら会話する二人。それに向かって掛けられた声があった。

既に前方へと出ていた姉弟の片割れ、弟からだ。左肩越しに笑いかけながらだった。

「ういーッス、このちゃんとアスナ！」

「ういーっすコタくん」

「アンタ達今日もやるの？」

「当然やる！？その為のエモノやで？」

そう言っただけは右手に握った二本の木刀を頭上で振る。

「見てろや！今日こそ……勝つたる！」

「はいはい、頑張れ頑張れー」

「コタくん、セクハラって知っとる？もう一年半ずつと言っとるんやけど」

「は？　　ウチじゃ身内と恋人に対してはスキンシップやて言われとるて言っとるやん」

「あははは……毎日言っでな？これからも解るまで」

「このか？アンタ誰の味方？さっき小太郎の味方みたいなこと言っでて、もうよく分からないんだけど……！？」

「基本ウチはウチの味方やで？」

「つまり好き放題！？」

……ま、せつちゃんのオパーイはやわこくて気持ちええから褒めなあかんし！

今日もお風呂楽しみやなあ、と思いながら彼女は滑り続ける。

そして、状況が動いた。

目の前の二人が二刀を構えたのだ。

二人とも構えは同じだ。

肩から力を抜いて手をだらりと下げて走り続けている。

それを見た周囲の人間は叫びだす。

「……来るぞ！ 剣舞姉弟が今日もやるぞ！ トトカルチョ準備！」
「ヤヴォール！」

疾走する生徒たちが携帯電話を取り出すと即座にとあるメールアドレスに数字を打ち込んで送る。

メールを送った人間の中から次々と声が生まれる。
その中には、

「いつもの通りに白に200だ！」

こういったモノが多い。

白に賭ける、という人間が7割を占めるため、倍率は非常に低いのだが、黒に賭ける、という酔狂な人間も少なくない。

そういう人間は今日こそ勝てよ、という願掛けを込めて高額を投げ込むこともあるのだが、今まで一度もリターンが無い。

しかし、未だ弟の方の勝利を祈る人間は多く、現在に至っている。

「願掛けだ！ 今日こそ……黒に1！」

「期待低いじゃねえか！」

弟の勝利に掛けた男子生徒に対して総勢から指摘が入る。

二人の少女達はそれを眺め、

「皆も本当に飽きないわよね……」

「まあ、コレ昔も6年間続いてたって言うしなあ。コレ始まったときは『10年振りにソードダンサーズが現れた』ってことで大騒ぎになったやろ？」

「うん。アイツら 二代目なのよね。ホント驚きだわ。こんな馬鹿騒ぎが15年くらい前にもあったなんてね」

●

「んじゃ」

「ん」

二人が短く声を交わす。

それは意思表示であり、合図だ。

二人の肩が並ぶ。

弟は左を向いて、姉は右を向いて、笑みを互いに見せ合う。そして、どちらとも無く、言葉が出る。

「 勝負！」

太極が衝突した。

●

麻帆良学園中等部。

二年」組教室。

剣劇を演ずる姉弟の片割れ、弟の方が通う教室だ。

生徒の入りは4割と言ったところであり、その中でも二人。異様な気を放つ者が居た。

金髪の男子生徒は次々と入る携帯の着信に有頂天。

「ヒヤッハア！まーちゃん！今日も来たよ来たよ！」

その隣の茶髪の男子生徒も、一見するとそうは見えないが興奮している。

「良し。集計終わり次第茶々丸に送れ。今日も昼には分配出来るだろ」

彼らがトトカルチョの元締めだ。

入るメールは賭ける金額と賭ける対象を打ち込んであり、そのデータを集計するのが彼らの仕事の一つだ。

集計後は極めて有能な女子中等部の生徒に送って倍率・分配金額（オッズ）
バラ撒く分）・残り^{儲け}を計算させる。

「オッケー！今日はいくら儲かるかな！」

「まあ、ウチの隊の支出担当が無駄に使う分を賄えるかどうか怪しいくらいだよなあ。運の良い日なら滅茶苦茶儲かるけど」

「まーちゃん結構悲観的に見積もるね！でも金って使わなきゃ意味ないよ！ドンドン行こう！」

「使う時に使える金が無いよりはいいだろうが……」
「というかお前はそういうモノだしなあ」

そして外の喧騒に思いを遣り、諦めの息を吐く。

「……まあ、全てはアイツが勝てないから儲からないんだけどな。そろそろ惜しいところまで行くくらいに成らないもんか」

●

朝空。

始業ベルまで残り7分。

屋根の上に人影が2つ。

走る生徒たちから見れば右側の方だ。

奔る。

跳ぶ。

拍子を鳴らす。

風を斬る。

そして、踊る。

舞う。

空に躍るは黒と白。

その反対側の屋根の上を駆け抜ける者が有った。

長い銀髪を散切りにした長身の男だ。

服装は崩した制服。

それは麻帆良学園中等部の生徒であることを示している。

身の丈二メートル、には及ばないが巨体だ。プロポーションは整っており、頭身で言えば8頭身だ。

「毎朝恒例ショートカットコオオオッス……！」

深い前傾。

地を這う獣のように建造物の尾根を駆ける。

表情は切羽詰まったこの状況を楽しんでいるのか、笑っていた。

一歩は巨体に似つかわしく大きい。

しかしその足音は小さく、その見た目に反する。

空を踏んで歩くように、軽やかに、しかし重戦車のごとく疾走する。

野太い声が響く。

「待つよん……！」

それに続く巨体がある。そこからの声だ。

此方は黒髪の坊主頭。眼前を走る男子と比べると少し身長は低い。

体格は筋骨隆々としている、と言えば良いのだろうか。

足回りの力強さは先行する者を超えるように見える。

何故ならば、

「ダイジン！もつと飛ばして！クレイなんか追い越しちゃえ！」

「無茶言つなよん！黒菜ちゃんも普通に走ればいいじゃん！あとクレインめちゃくちゃ速いよ！無理！」

右肩に座るのは女生徒。

身長は130cmと少し、と言った所でとも中学生には見えない。

それを乗せる男子生徒が30代くらいに見えるので、比較すると非常に歳が離れているように見える。

黒く長い髪。前髪は目を覆い隠す辺りで切り揃えられ、腰の辺りまで届くだろう後ろ髪は速度によって躍る。

「ぎいー！ダイジン雷！雷落としちゃえ！」

「それだと一回止まらなきゃダメなんだけどん！あと人が多いから使

「つちやダメ！」

この人外じみた疾走の主らは、本当に人を外れた身の上である。

「そもそも屋根の上走ってる時点で見つかったらアウトなんだけどねん！」

見つかる結果がもうすぐ来る。

運命の悪戯が今日も起こる。

●

未だ地上は突進する人並みで溢れかえる。

その中でひとときわ目立つ二人がいる。

男女の組み合わせだ。

路面電車を追い越しながら走っている。

男は右サイド、女は左サイドから。

「行きますよタツちゃん！」

「跳ぶぜりょーちゃん！」

電車の進行方向の真ん前に出るやいなや跳躍。

天井の上に着地し、座り込む。

「ふいー、今日もうまく行ったねりょーちゃん！」

「これであと1分はイチャイチャできますよタツちゃん！一分あれば早漏なら一回くらいは出来ますねきつと！」

「わぁおりょーちゃん偶に大胆になるよね！でも朝だから！路電の屋根の上とかサイコーに露出プレイだよ！」

長い手足を隣に座る恋人に絡める彼女と、それを受け入れて満悦の彼氏、と言った所だ。

身長は同じくらいだが、女子の方は手足がスラリと非常に長い。

髪型もやや似ており、どちらもショートカットだ。

「お主らまた会ったでござるなー。しかも毎回ネタが過激で困るでござるよ……」

そこに、先客が既に居た。

女生徒だ。

振り返ったそこに、彼女は立っていた。

二人とも軽く手を挙げて返事を返す。

「ども、楓さんやつほー」

「やつぱ忍者違うねー。俺らただのジャンパーだもんねりょーちゃん」

「いや、拙者忍者ではないでござるよ？その辺よろしく、でござる」

その反応に二人は、ふむふむやはりいい、とつぶやき、

「うーむ、やつぱウチの忍者とは違うね！すごく『できる』感じるよねりょーちゃん！」

「ええ、ウチのは結構無能だったりしますからね」

そう言つて褒め称えとくノーは右手で頭を掻いて、

「いやいや、拙者もまだ未熟の身なれば」

「え？」

「……え？」

本音という失言に対して返す反応は毎回同じである。
もはや二人とも様式美として捉えている。
続く忍者の言葉もやはりいつも通りである。

「……拙者忍者じゃないから今の無しでござる……！」

そして、剣劇は空中で今も尚続いている。

その事について、りょーちゃん、と呼ばれた女生徒は隣の彼に聞く。

「……今日はどっちに賭けたんですか？」

「うーん、俺はね。無効試合に賭けたよ」

「それは随分確率低いでござるが……幾らで？」

それを聞いて楓は期待の値を問いかける。

勿体振って少し間を貯めた後に、にやり笑いと共に彼はこう答えた。

彼は飛躍を望む。

その戦闘職クラスの象徴の通りに。

竜騎士は跳ぶ機会を逃さない。

だから当然、

「一万」

「大きく出ましたねー！それでミスったらホテル代1回分消えちゃいますよ！」

「中学生はそういう如何わしいところに入ってはイカンでござるよ……まあとにかく、しかしそんな都合の良いことが……」

楓が訝しげに漏らした瞬間、破壊音が一つ響いた。
音源は左前方。

窓が割れた。

原因は弟の木刀が弾き飛ばされたことだ。

「あるんでござるなあ……」

「うん、来ますね」

「勝った！」

三者の内、二つは同じ反応。

そして残りは勝ち誇る表情を見せた。

だが、彼らは忘れている。

彼ら自身も、狩られる側だということを。

●

破壊を確認すると同時に、新たにまた人影が現れる。

屋根の上に現れるのは一人。

白いスーツを着込んだ、一見すると中年に見える眼鏡のアラサー。彼は自身の最後の朝出撃からどれくらい経ったかを数え始める。

……今回は約7ヶ月振りか。前よりは壊さなくなったけれども

「今日は、ヤッてくれてしまったようだね……！」

笑顔で濃密な怒気を放つ。

顔色は変わらないが、眼鏡が不自然に光を反射するせいで表情が読み取りにくい。

彼こそはデスメガネ・ホワイト白い眼鏡の死神。

”麻帆良学園広域指導員” 高畑・Ｔ・タカミチ。

初めて彼がそう呼ばれてから早幾年。

彼自身、その名については満更でもない、と思っている。

自分の存在が荒事に対する抑止力として機能している証でもあるのだ。

それならば自分にはそういう価値も有るのだ、と自信に変わる。

彼は拳をズボンのポケットに入れて佇む。

『構え』だ。

だが、ふと視界に入るものがあつた。

反対側の屋根を疾走する２つの巨体だ。

彼は右手の『構え』を解く。

ポケットから手が出ると同時に、溜息まで出た。

そして、上着の右のポケットから携帯を取り出す。

掛ける相手は、彼の師匠。

コールが２回ほど鳴ると、相手側が出た。

「師匠？こつち見えてますか？」

え？もう捕捉してる？な

ら問題ないです。

そちら、任せます。ええ、人間が死ぬ程度でも構いません、丈夫ですし。一度ミンチにされたほうがいいんじゃないでしょうか、彼ら」

電話の向こうからは苦笑いが聞こえる。

まあ任されたぜ、と聴くと、お願いします、と返す。

電話を切ると、即座にポケットに戻し、「構え」を戻す。

……始業ベルまであと5分。二人もいるから急ぎでやるよ……！

時間との兼ね合いも考え、彼は自身の切り札を使うことを決める。
反対側の屋根からは既に圧倒的な力の波が感じられる。

今や師匠は戦闘準備が万全だ。

「構え」を再び解く。

その両手の行き先は胸の前だ。

空気の張り詰め。

その一瞬の後に、爆発があった。

師匠の放つ波動とほぼ同一。

師匠ともう一人、とある女の子からの直伝。

気と魔力の合一、『咸卦法』だ。

『気』と『魔力』は相反する。

その二つを同時に制御なし、若しくは半端な制御で操ろうとするのならば、それは自らを滅ぼす事となる。

だが、その反発という力を制御できれば。

暴走を思っままに制御できるというのなら、それは最強と見えるだろう。

彼は数年を掛けてそれを体得し、自らの切り札に加えることに成功した。

再びの『構え』。

砲撃の準備は十全。

なれば、前方から迫る剣劇の演者らを迎え撃つ。

「来い……！」

●
もう一つの波動がある。

高畑の立つ屋根とは反対側だ。

そこには座ってパイプを愉しむ眼鏡の老人がいた。
薄い灰色の角袖長着を着ており、着流しだ。

「やれやれ、もう俺もジジイなんだがな、っと」

立ち上がると、右手を左の着流しの袂に突っ込み『構え』た。

「おおーい、止ーまーれーよー」

一応は警告する。

だが、眼前に迫りつつある若者達に止まる気配はまるで無い。

……まあ、止まる訳はないな。どうせまた馬鹿なこと考えてるんだ
ろ。

溜息と共に、煙が吐き出された。

半秒後、白髪を揺らがせること無く彼はわずかに身動きを取った。
砲撃だ。

それは煙を突き破り、少年達の正面へ向かう。

……まだ、その実力で押し通れると思っ
ているんだろっ、な！

「毎回言っているんだが」

「

こんなものは、”デスメガネ・シルバー老けた死の眼鏡”画灯老人の実力の一割の表現に

も至らない。

「ジジイだからって嘗めるな！」

●

「うわあ　　！」

左上方の砲撃を目撃した者からは悲鳴が上がった。
地上だ。

こちらでトトカルチョの外れに嘆く声が蔓延したのだ。

「そ、そんな……出た……！死の眼鏡デスメガネが二人も……！」
「む、無効試合になっちまう！畜生！」

だが、老人の方は狙いが桜咲姉弟では無い。
そのことに気付いていた者達と言う。

「てか今日もデカイの二人とマイクロ一人が屋根にいたぞ！」
「屋根は混んでないからいいよな！アイツらデカイからこっちは不便だよそりゃ！」

「でもデカイから目立つっていい加減分らないかな……」

で、

「おお、落ちてくるぞー」

「ああ、またか」

「そろそろ突破しろよ、ジジイくらいなあ……」

だが、不屈きは他にも居る。

また、処刑人も二人だけではない。
厳密には『らしい』。

●

路面電車の屋根上で鈍い音が3つ響いた。
人間と屋根がスキンスリップする音だ。
屋根に倒れるのは3人の少年少女。

「ひ、ひい ！」

「出たあ ！？また出たあ ！？」

生徒たちの怖気は拡大していく。

未確認デスメガネが今日も出現した『らしい』ことが原因だ。
そもそも何事が起きているのかすら未だ謎だ。
そして、その現象をこう呼ぶ人間が居る。

なんかよくわからぬ死デスメガネ
”不可視死の眼鏡”

●

死デスメガネの眼鏡の登場時期は、それぞれ違っている。

始まりは画灯老人。

次は高畑教諭。

最後に未だ姿を見せぬ新たなデスメガネ。

7年前、5年前、そして3年前だ。

段々と増える死の眼鏡に、人々は恐怖した。

しかし、ヤンチャ坊主も絶滅しては居なかった。
だが、どちらが先かと言うと、ヤンチャ坊主の増加である。

そして伝説は更に紡がれていく。

●

右方の建屋の屋根上、砲撃が止まない。

既に姉弟は目標を互いから死神にシフトしていた。

態勢は打倒、しかし届かず。

大勢は妥当、つまり当然で、
体勢は逃げ腰。

さあ逃げる。正面を向けて逃げる。

「おお……！」

屋根の上という半端に不安定な足場を大きくステップしながら避ける。

前進と横飛びの複合で、進みながら避ける。

瞬動と虚空瞬動は禁止だ。人目がある。

相手もそれを考えて使わない。

だが、この砲撃はもはや『当然の風景』となっているため自重が無い。

有るとすれば、全て地面と平行に撃っているところだろう。建造物や地面に被害が出るのは不味い。

移動手段はステップと走り。

相手も同様だ。

だが、それなら逃げられるのか。
いや、逃げられない。

相手は百戦錬磨の戦士。

ただ走って逃げられるのなら苦労は無い。

ならば正面から普通に打ち倒せるのか。

土台無理な話だ。

相手の攻撃は既に日常であるが、自分たちの力は未だ非日常だ。
それでは勝てない。

「まあ、お前囃にすれば始業ベルには間に合うやろ」

跳躍しながら走る姉弟。

姉の方が隣を走る弟に向かって呟いた。

「姉ちゃん外道ちゃうか！？普通は姉がカッコしいことに死亡フラグ立てて見事に死んで感動のラスト2話前やる！？」

……喧しい。でもコレチャンスやな。

弟は抗議の声を発しながらも、避けて進む。

口も足も淀みない。

また、それに対する返しも流れる水の如く飛び出す。

「違うわ、コレ相手に逃げ切れたら中々やろ」

つまりこれはな、

「試練や。つまり愛、そしてその象徴はオパァーイ……！」

「お、お、お……！オパーイ頂きましたあー！」

……アホな弟で助かったわ！毎回やけど学習無いな！姉として複雑やけど！

オパーイオパーイとふつくらマシユマロふわふわ円満に纏まるその協議に、第三者が介入した。
高畑だ。

「小太郎君、馬鹿じゃないか！？理不尽な要求からオパーイまで繋がられて満足する君の思考回路は馬鹿じゃないのか！？」

馬鹿じゃないのか！？と三度目まで繰り返される。
しかし、小太郎の返しも慣れたものであり、

「男は皆、馬鹿で結構やろ！」

「それもそうか」

……アホ二人でホンマ助かるわ……！まあ、それは置いといて

「……な！？」

叫んだのは男衆。

異常を認めてそれを咎めるように叫ぶ。

突如、屋根から人影が一つ減ったのだ。

姉が飛び降りた。

丁度人通りがやや収まってきた頃であり、着地場所に事欠くことはない。

「ははははははは！」

つまり逃げた。

…… かつたなアホめ！

●

刹那の狙いは単純だった。

アホ会話の空気を作り出して場の展開を低速化させることだ。

その事によって、全体のテンポは下がる。

だが自分のテンポは変えない。

自分の拍子が相手の拍子より早く打たれる。

故に先を取れる。

そのアドバンテージをどう利用するのか。

刹那が選んだのは逃走。

その狙いは完全に達成された。

出遅れた男衆は屋根を飛び降りた。

ほぼ同時だ。

だが遅い。

彼女は全力で加速し、既に人混みに紛れ込んでいる。
これでは高畑と言えど流石に狙えない。

つまり、

「 また負けた！？」

笑いが止まらないのは桜咲・刹那。
桜咲姉弟の姉である。

「ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい」

万歳三唱は近衛・木乃香。
その姉弟の親友である。

「良くあそこから三分で間に合うわよね……」

ジト目と呆れの表情は神楽坂・明日菜。
その三人とは腐れ縁にして親友。

また、木乃香のルームメイトでもある。

「おめでとうございます刹那さん。しかし、もう少し余裕を持って始めても良いのでは」

無表情に刹那を称えるのは絡繰・茶々丸。

刹那のルームメイトにしてトトカルチヨの情報処理担当者。今日は彼女は日直だった為、刹那よりも早く寮を出ていた。

「でもこの勝利パターンはもう使えへんから次の作戦を考えなアカンな！まあ今回勝ったし笑わな！ははははははは！」

「話を聞いて下さい」

「ははははははぶうへあつ！」

「せ、せつちゃん!?」

ツツコミが入る。

物理・言語同時に入った。

様式に則ったツツコミが刹那の後頭部に炸裂した。

「刹那さん。後で高畑先生からお説教があると思いますが、強く生きて下さい」

「見捨てるんか！？ルームメイトの誼や！弁護してくれへんのくうあるぶえは！？」

再びのツツコミ。

先程よりも威力が上がっている。

「流石にそこまで面倒は見切れません」

●

生徒指導部室。

遅刻生徒が並ぶのはその前の廊下なのだが、

「ぐるるるる……！ショートカットしたっていいじゃんかよ……！」

「ダイジン、やっぱ雷使おうよ？」

「だから黒菜ちゃん駄目だったのん」

「ううむ、拙者一体何故気絶していたので……」

「楓さん、多分ここ三年で現れたっていう不可視のデスメガネの作業だよ」

「全く姿も仕置の手段も分かりませんけどね……」

現れたのは、眼鏡を掛けたボサボサの黒髪の冴えない男と新田。

「えーと、　　また君たちかい？」

「どもつす衛宮先生！」

威勢良く全員が返事する。

「『どもつす』じゃないだろう！お前等遅刻しすぎだろう！しかも……あぁ、また窓が割れた……！」

「ハハハ、まぁウチの生徒は元気有り余ってますしねえ」

新田は衛宮の薄い反応に日々業を煮やしており、彼にとっての受難の原因の一つに数えられている。

衛宮は楽観主義者であり、日和見主義者なのだ。

新田はそれが非常に困っている。

「君は気楽だな……羨ましいを通り越してブン殴りたいぐらいだよ……！」

「ハハハご冗談をエブホオっ！」

新田の拳が衛宮の左テンプルに炸裂する。

怒りの籠った重い一撃だ。

「済まない、手が滑ったっ……！」

「ハハハ、手が滑ったなら仕方有りませんよね」

「ああ、仕方ないな。ハハハハ……スッキリした」

あまり堪えていない衛宮の反応は気にしないことにし、殴ったという結果だけを慰みとすることにした。

「　　まぁ、何時ものメンバーですね」

ボロボロの『くろいおばか』を後ろ襟を掴んで引き摺りながら歩いてくるのは高畑だ。

馬鹿は気絶している。

「しかもほぼ全員J組ですぞ！？一体どういうことですか衛宮先生！あと貴方の娘も酷いので家族会議で強制ギルティにして頂けるといいですね……！」

新田が担任の衛宮を糾弾する。

しかし衛宮は日和見な反応であり、

「まあ、若いですしねえハハハ」

新田の頭痛は酷くなる一方である。

「衛宮先生、もう連れて行ってしまってください……！」

「分かりました新田先生。じゃあ、君ら行くぞー」

「オッス！」

衛宮が共学部2年J組の生徒を引き連れて行く。

馬鹿はクレインという生徒に引き渡され、またも引き摺られる。今度は左足首を掴まれている。

「では新田先生、僕もこれで。楓君、行こうか」

「あいあい」

「うむ、高畑先生。今朝もご苦労様でした」

高畑と楓もその場を立ち去り、女子中等部2年A組へ向かう。彼の受け持つクラスだ。

「後、一年半も……か！」

頭を抱えて唸る新田がその場に残った。

彼の受難は終わらない。

キャラクター紹介・プロローグ（前書き）

ちょっとだけ更新してみようと思ったたらネタが無いのでキャラクター紹介。

キャラクター紹介・プロローグ

神楽坂・明日菜

ややバカ。熱血バイト少女。好き好き大好き渋いオジサマ。

近衛・木乃香

京美少女。記憶喪失系・発作系・カナヅチ系・高所禁止系。

桜咲・刹那

桜咲姉。天使な方の白。ルーティンワークイズバストアップ体操。
オッパイソムリエ。

桜咲・小太郎

桜咲弟。熱血天然アルバイター。超シスコンにして巨乳姉好き。養
護施設のボランティア。

絡繰・茶々丸

美少女型アンドロイド。常識人。ツツコミが割と的確。

衛宮・依璃夜

悪魔な方の白。ボケで攻める系。アイドルなアイドル。

長瀬・楓

遅刻常習犯にして危険行為常習犯くノ一。糸目長身巨乳忍者者梓。
ござる口調にいきり立つ奴がいらっしやる。

那波・千鶴

巨乳姉系。貴重な母属性持ち。千鶴さんじゅうよんさい。幼稚園の
ボランティア。

近年若返りの兆候が見られている。

長谷川・千雨

依璃夜と同室。ネットアイドル。常識離れた美貌の持ち主に微妙に僻む毎日。

かなりレアな常識人。

タカミチ・T・高畑

ややバカの渋いおっさん英語教師。明日菜の片思いの相手。3A担任。デスメガネ・ホワイト。

弓野・深雪

既婚者。旧姓”御前崎”。故に通称”御前”。3A副担。チヨーク投げの神。夫にかなり依存気味。

画灯老人

京都在住。フラツとやってきて悪ガキを肅清する。デスメガネ・シルバー。明日菜の里親。

最近は大人向けのゲームも嗜む。

お気に入りにはT・N・T+の「幽鬼殲滅街」。

衛宮・切嗣

バカ。謎のタフガイ。元PMCの経理担当。うっかり魔法に関わり、うっかり魔法教師に。

クレイン・クライン

主に縦に長い。屋根ランナー。ぐるるるる！くノ一属性持ち。ござる口調が溜まらない人種。

鹿波・大仁

かば ひろひと

縦にも横にも長いおっさん。ダイジンさんじゅうよんさい。ロリコン。屋根ランナー！。

臼井・黒菜

縦横胸尻の奥行きが絶望的。おかっぱ前髪枠。屋根ランナーライダー！。

東海林・辰真

高飛び野郎。バカッフル01の片割れ。彼女と身長が同じ。

永手・令

高飛び女郎。バカッフル01の片割れ。背が普通に高い。モデル体型。

新田

指導教員トップ。トップ頭髮薄いぞ何あったの。

シャドウフレイム

影炎亭の主人

弓野先生の旦那。常にサイレントにしてスマイリーメガネ。神出鬼没ケバブカーのドライバー！。

奥さんを甘やかし気味。購買のパンとか弁当とか作ってる人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6850w/>

Fate/Distorted Destiny IN Magister Negi Magi 本編

2011年12月28日21時59分発行